狐のつかい

新美南吉

山のなかに、猿（さる）や鹿（しか）や狼（おおかみ）や狐（きつね）などがいっしょにすんでおりました。

みんなはひとつのあんどんをもっていました。紙ではった四角な小さいあんどんでありました。夜がくると、みんなはこのあんどんに灯（ひ）をともしたのでありました。

あるひの夕方、みんなはあんどんの油（あぶら）がもうなくなっていることに気がつきました。

そこでだれかが、村の油屋（あぶらや）まで油を買いにゆかねばなりません。さてだれがいったものでしょう。

みんなは村にゆくことがすきではありませんでした。

村にはみんなのきらいな猟師(りょうし)と犬がいたからでありま す。

「それではわたしがいきましょう」
とそのときいったものがありました。狐(きつね)です。狐(きつね)は人間の子どもにばけることができたからでありました。

そこで、狐(きつね)のつかいときまりました。やれやれとんだことになりました。

さて狐(きつね)は、うまく人間の子どもにばけて、しりきれぞうりを、ひたひたとひきずりながら、村へゆきました。そして、しゅびよく油(あぶら)を一合(ごう)かいました。

かえりに狐(きつね)が、月夜のなたねばたけのなかを歩い

ていますと、たいへんよいにおいがします。気がついてみれば、それは買ってきた油のにおいでありました。
「すこしぐらいは、よいだろう。」
といって、狐はぺろりと油をなめました。これはまたなんというおいしいものでしょう。
狐はしばらくすると、またがまんができなくなりました。
「すこしぐらいはよいだろう。わたしの舌は大きくない。」
といって、またぺろりとなめました。
しばらくしてまたぺろり。

狐の舌は小さいので、ぺろりとなめてもわずかなことです。しかし、ぺろりぺろりがなんどもかさなれば、一合の油もなくなってしまいます。

こうして、山につくまでに、狐は油をすっかりなめてしまい、もってかえったのは、からのとくりだけでした。

待っていた鹿や猿や狼は、からのとくりをみてためいきをつきました。これでは、こんやはあんどんがともりません。みんなは、がっかりして思いました、

「さてさて。狐をつかいにやるのじゃなかった。」

と。

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：めいこ
校正：もりみつじゅんじ
2002年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。